

ギリシア、クレタ島のビザンティン聖堂における 装飾プログラムの特質について

——西壁装飾と「聖母の眠り」図を中心に——

武 田 一 文

序

栄枯盛衰を経ながらも、ビザンティン帝国は千年に亘り長らえた空前の国家である。その版図は、地中海世界の東半分を中心とした広大なものであった。帝国内で制作されたキリスト教美術であるビザンティン美術もまた、時代、地域ともに広大な領域を扱うこととなる。一方で亡国の悲哀として、各地に残された遺物は必ずしも多いとは言えず、特に首都コンスタンティノポリス（現トルコ・イスタンブール）に残る壁画を描いた聖堂は僅か三聖堂に過ぎない（断片を除く）。より古いものに関して言えば、ビザンティン人自体による破壊（^{イコノクラスム}聖像破壊運動）によっても多くの美術作品が失われた。本論で取り上げる聖堂装飾については、帝国の中心よりも周縁に残るものが多い結果となる。周縁部の美術制作には、中央からの図像伝播と共に、地域での独立した（或いは孤立した）図像の展開があったことは容易に予想される。ビザンティン世界は、バルカン半島の険しい山々やエーゲ海の島々など、地理的にもそのような環境を醸成しやすいものがあった。筆者は「聖母の眠り」図像においてカッパドキアにおける地域性を指摘したが⁽¹⁾、本論はその試みに続くものである。「保持されたもの」と「変化したもの」を通じて、図像がどのようにビザンティン人に見られていたのかを考えたい。

方 法

本論のフィールドは地中海に浮かぶ島、クレタ島である。ギリシア最大のこの島は面積8336平方キロと兵庫県ほどの大きさであるが、東西に細長く、島を横断するように高峰が並ぶ起伏の激しい地勢である。その歴史は地中海の他の島々と同じく複雑であり、古代ローマ帝国が東西に分裂して以降はビザンティン帝国が領有したが、9世紀から10世紀にかけ一時ムスリムの支配下となった。その後再びビザンティン帝国に奪還され、1204年の第四次十字軍までその支配が続く。第四次十字軍後ヴェネツィア共和国に占領され、17世紀半ばにはオスマン帝国により領有される。近代にはその領有が揺れ動いたものの、最終的にギリシアへ帰属することとなった。

さて本島に残るビザンティン聖堂は、圧倒的多数が後期ビザンティン期（14～15世紀）、或い

はポスト・ビザンティン期（1453年以降）に属するものである。後期以降はヴェネツィアに支配された期間が長いが、聖堂の図像はビザンティン系のものを長く描き続けている。一つの島とはいえ、ある種の傾向を見出すことの出来るサンプル数を確保することは容易ではない。しかし本島においては、ギリシア人の研究者 I. Spatharakis が大部の著作を纏め、その全容を明らかにしつつある⁽²⁾。本論では、このスパタラキスの調査を基に、同地の「聖母の眠り」図像について解釈を行うことを試みたい。

スパタラキスの著作においては、後期ビザンティン期までのクレタに残る聖堂を、総ざらいしつつ多くの図版と共に聖堂の基礎建築情報、図像主題の同定と配置の報告が為されている⁽³⁾。現在、最も大きな行政区画である4県のうちレティムノ県の、各市に一卷を割り5市中4市分が発行済みである。未だクレタの全てを納める訳ではないが、そのサンプル数は百を超え、またポスト・ビザンティン期を殆ど含まないことで時間軸が広がり過ぎず、各聖堂の影響関係が見えやすいことが期待される。一方で各聖堂、各図像の報告は記述的、概説的にならざるを得ず、図像の配置やイコングラフィーについて詳細な議論はなされていない。そこで「聖母の眠り」という一図像を軸に、新たな知見を求めるのが本論の目的である。具体的な方法として、まず以下にスパタラキスの著作から「聖母の眠り」が描かれた聖堂を取り出し、その簡潔な記述を行う。聖堂の構造、年代、図像配置などはいずれもスパタラキスの調査結果に従う。記述する内容は1. 聖堂の構造、2. アプシスに描かれた図像、3. 西壁に描かれた図像、4. 「聖母の眠り」の配置、5. その他主に「眠り」についての筆者の所感を記す。1については、殆どの聖堂が単廊式バシリカのため、その場合は特に記さない。2～4は、聖堂装飾の定型としての「聖母の眠り」との比較を行うものである。ビザンティン聖堂はアプシスに聖母子を描くことが最も多く、また西壁に設置される扉口上部が「聖母の眠り」の定位置である。東側に幼児キリストを抱く聖母マリアが、西側に赤ん坊の姿をしたマリアの魂を抱くキリストが立つことによって、形態的類似と意味的対照が生み出されるのが、聖堂装飾プログラムの定型となっている⁽⁴⁾。この定型が維持されているのか、逸脱しているならば新たなプログラムが生み出されているのか、或いは無秩序な図像選択になってしまっているのかを考える。

各聖堂の報告

レティムノン Rethymnon 市

聖ゲオルギオス聖堂、アギオス・コンスタンティノス Agios Konstantinos 村⁽⁵⁾、1401年⁽⁶⁾

アーチで東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「プラティテラ型聖母子」⁽⁷⁾。西壁は「最後の審判」。出入口は西側。中央ベイには8主題の図像が描かれるが、「聖母の眠り」は北側の上部に配置される。東側に「最後の晩餐」、南側に「神殿奉獻」、下方は「ラザロの蘇生」と接する。この配置に積極的な意味は見出せないように思われる。中央ベイには十二大祭が8区

画中6区画を占めており、十二大祭を纏めただけであろう。「神殿奉献」の東には「降誕」が描かれており、これが「神殿奉献」と代わって「聖母の眠り」と接する配置であれば、シチリアのラ・マルトラーナのような形態的一致を見ることが出来たであろうが⁽⁸⁾、画家はそれに思い至らなかったか。なお「眠り」の配置が珍しいことは記されるが⁽⁹⁾、それ以上の指摘はない。

アギア・パラスケヴィ聖堂、アルカディ Arkadi⁽¹⁰⁾、15世紀初頭⁽¹¹⁾

2区画に分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「プラティテラ型聖母子」(図1)。西壁は「最後の審判」。出入口は南側。扉口上部には「最後の審判」の一モチーフである「楽園」が描かれる。「聖母の眠り」は北壁面の西側に描かれる。上部にこれも「審判」のモチーフである「地と海の擬人像」、更に上部には「十字架称揚」が配置される。向かい側には出入口と「楽園」が描かれる。



図1 「プラティテラ型聖母子」アギア・パラスケヴィ聖堂、アルカディ

アギオス・ヨアンニス・エヴァンゲリスティス聖堂、カト・ポロス Kato Poros⁽¹²⁾、14世紀前半⁽¹³⁾
東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「デイシス」。西壁は後代の拡張の際に失われた。「聖母の眠り」は北壁の西側に描かれる。「眠り」と接する西側ヴォールトは、「デイシス」、「十二使徒」、「天使と聖人」などが描かれ、これらは「最後の審判」を構成するものである。おそらくは西壁にも「審判」図が続いて描かれていたのだろう。

パナギア聖堂、ミリオケファラ Myriokephala⁽¹⁴⁾、1500年前後⁽¹⁵⁾

ギリシア十字式の聖堂。アプシスは1000年前後に描かれた「聖母子」。西壁の主題は報告され

ていない。後代、西側にナルテクスが増設され、その北壁に「聖母の眠り」が描かれる。ナルテクス壁画の保存状態は悪く、他に北壁には大天使ミカエルとデイス像が僅かに窺える程度とのことである。

パナギア聖堂、ルソスピティ Rousospiti⁽¹⁶⁾、14世紀初め⁽¹⁷⁾

ヴォールト天井。後に北側に新しい出入口が設置されたため北壁面は聖所付近を除きほぼ壁画が残らない。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。西壁には「磔刑」。「聖母の眠り」は南壁面に描かれる。ヴォールト天井には十二大祭を初めとした物語場面が描かれるが、「眠り」はそれらとは聖人のメダイヨンの列によって区切られ、他の物語場面とは接していない。向かい合わせとなる北壁面は破損しているため図像は不明である。

パナギア聖堂、セトゥレス Saitoures⁽¹⁸⁾、1300年頃⁽¹⁹⁾

東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。出入口は西側だが、西壁の壁画は完全に失われている。「聖母の眠り」は北壁の最も西側に描かれる。「眠り」と接する西側ヴォールトには、頂部の「空の御座」を中心とした「最後の審判」が描かれている。

アギオス・ヨアンニス・エヴァンゲリスティス聖堂、セリ Selli⁽²⁰⁾、1411年⁽²¹⁾

東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「キリスト・パントクラトル」。出入口は西壁にあり、西壁の壁画主題は「最後の審判」である。「聖母の眠り」は中央ベイ下部の南壁に位置する（図2）。「眠り」の上部には「嬰兒虐殺」が描かれる。

ソティル（救世主）聖堂、ズーリディ⁽²²⁾、14世紀初め⁽²³⁾

天井はヴォールト天井。アプシス図像は「デイス」。扉口は西側で、西壁上部には「聖母の眠り」が描かれるという、ビザンティン聖堂装飾の定型に則った配置である。ただしアプシスの「聖母子」と呼応する形で西壁に配されることを考えれば、聖堂全体が定型に則っているとは出来ない。「最後の審判」図は描かれない。

ミロポタモス Mylopotamos 市

パナギア聖堂、アギオス・ヨアンニス Agios Ioannis 村⁽²⁴⁾、1300年頃⁽²⁵⁾

東西に2分節されたヴォールト天井。アプシスの壁画は失われている。後代に西側にナルテクスを増築したため、西壁は残存しない。「聖母の眠り」は西側ベイに描かれる（図3）。ヴォールトの北側を上下に二分し、上部には「復活」と「変容」、下部に2画面分の幅をもって「聖母の



図2 アギオス・ヨアンニス・エヴァンゲリスティス聖堂、セリ



図3 パナギア聖堂、アギオス・ヨアンニス村

眠り」が描かれる。「眠り」の東側には「聖母の神殿奉献」が配置される。

アギア・イリニ聖堂、アギオス・ママス Agios Mamas 村⁽²⁶⁾、1350年頃⁽²⁷⁾

東西に2分節されたヴォールト天井。アプシスを含む東側の壁画は殆どが失われている。出入

口は西壁、西壁上部には「磔刑」が描かれる。西側ベイは4つの画面に区切られ、最も北側の区画に「聖母の眠り」が充てられる(図4)。「眠り」の西側には「イェルサレム入城」、南側には「洗礼」が配置される。また東側には「空の墓」を描く。上記を含めヴォールト天井には十二大祭を中心に主題として選択されるが、これは規模が小さく、多くの主題を描き込むことのできない聖堂としては合理的な配置であろう。「眠り」の周囲の画像配置には、十二大祭であるという以上の意図は見出せない(「空の墓」は十二大祭図像ではないが、これはさらにその東側に描かれた「冥府降下」と呼応した図像であると判断すべきだろう)。一方、「眠り」の下方にはイコン的な聖人像として賛歌作者コスマスとダマスコス、ヨアンニスが配されるが、これはスパタラキスの指摘するとおり⁽²⁸⁾、より後代の作例に見られる「眠り」図像への二人の追加の比較的古い作例となる。



図4 アギア・イリニ聖堂、アギオス・ママス村

アギオス・ママス聖堂、アギオス・ママス村⁽²⁹⁾、1318年⁽³⁰⁾

東西に2分節されたヴォールト天井。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。西壁に出入口があったが、現在は増築されたナルテクスと繋がっている。増築の際に破損しているが、西壁には「聖母の眠り」が描かれる。聖堂内に「最後の審判」は描かれない。

アギオス・ヨアンニス・プロドロモス聖堂、アノギア Anogia⁽³¹⁾、1320年頃⁽³²⁾

二連バシリカ構造で、壁画が残るのは南側のみである。東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスは「デイス」が描かれる。西壁はナルテクスと通じ、壁面には「ユダの裏切り」、「洗礼者ヨハネの誕生」、「洗礼者ヨハネの斬首」が描かれる。西側ベイにはキリストの受難伝が配されるため、「ユダの裏切り」はそのサイクルに含まれるものだろう。「誕生」と「斬首」は、本聖堂が奉献された洗礼者ヨハネの生涯を象徴するものとして2場面が選ばれたと考えられる。いずれにせよ西壁に「聖母の眠り」を描くという定型に固執していなかったことは確かである。「聖母の眠り」は中央ベイに配置される。壁面を南北方向に4つに区分、更に東西方向に2つに区分し、8つの区画を作る。そのうち最も北側の2区画を使用し、「眠り」が描かれる。その左右には賛歌作者コスマスとダマスコスのヨアンニスが立像で描かれている。上方には「空の墓」と「復活」、西には「埋葬」、東には「聖霊降臨」が並ぶ。本聖堂は概ね南壁面から北壁面へと物語場面の時間が進むため、「聖母の眠り」も時間軸に沿って配置されたものと思われる。

アギア・マリナ聖堂、ハレパ Chalepa⁽³³⁾、1330-50年⁽³⁴⁾

東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「プラティテラ型聖母子」。西壁に出入口があり、上部に「聖母の眠り」が描かれる。「最後の審判」は描かれていない。

アギオス・ヨアンニス・プロドロモス聖堂、ディスクーリ Diskouri⁽³⁵⁾、1400年前後⁽³⁶⁾

東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「デイス」。出入口は西壁にあり、現在は左半分しか残存しないものの、「聖母の眠り」が描かれている。「最後の審判」は描かれていない。

アギオス・ヨアンニス・プロドロモス礼拝堂、エルフィ Erfi⁽³⁷⁾、14世紀初め⁽³⁸⁾

現存する構造物はナルテクスのみである。東壁の南側に「聖母の眠り」が描かれるが(図5)、ナルテクス内には本来ナオスに描かれる十二大祭主題である「変容」「イエルサレム入城」「冥府降下」も描かれるため、現存するナルテクスの図像が本来のナオスが存在したときからのものか判じがたい。従ってプログラムを論ずることは難しく、ここでは参考例として挙げるに留める。

アマリ Amari 市

パナギア聖堂、アギア・パラスケヴィ Agia Paraskevi 村⁽³⁹⁾、1516年⁽⁴⁰⁾

天井はヴォールト天井である。アプシスは「聖母子」、西壁には「聖母の眠り」というビザンティン聖堂装飾の定型を採る(図6)。ただし扉口は西ではなく、南に開く。扉口付近の主題は「変容」「ラザロ」であるが、扉口上部東側は壁画が失われている。失われた図像を含め周辺の主題選択



図5 アギオス・ヨアンニス・プロドロモス聖堂、エルフィ



図6 パナギア聖堂、アギア・パラスケヴィ村

からキリスト伝を時系列順に並べたものと思われ、扉口に特別に配置された図像ではない。「最後の審判」は描かれない。

アギオス・ゲオルギオス聖堂、アポドゥーロウー Apodoulou⁽⁴¹⁾、14世紀初め⁽⁴²⁾

ヴォールト天井を持つ。アプシスは「デシス」を描く。扉口は南側に設けられる。西壁は上部の図像は失われており、献堂銘と聖人像のみが残る。「聖母の眠り」は南壁の西側に描かれる。接する主題は上方に聖ゲオルギオス伝、向かい側には聖ディミトリオス像が描かれる。これらに装飾プログラムの意図は無いと思われる。

アギオス・ニコラオス聖堂、アポストリ Apostoloi 村⁽⁴³⁾、14世紀末⁽⁴⁴⁾

東西に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「デイシス」が描かれる。扉口は西壁に開き、その装飾は残存部分全体が「最後の審判」を描く。「聖母の眠り」は中央ベイ下部の北壁に描かれる。ヴォールト天井の直接接するフリーズには壁画が残らないが、天井には「磔刑」^{ソフィア}、「エッサイの木」が描かれ、向かい側には「神の智慧」が描かれる。「眠り」の左右はいずれも聖人像である。

アギオス・オヌフリオス聖堂、イェンナ Genna⁽⁴⁵⁾、1329年⁽⁴⁶⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井（中央ベイは他に比べ幅が狭い）を持つ。アプシスには「デイシス」。扉口は西壁にあり、壁面は「聖母の眠り」で覆われる。「最後の審判」は描かれない。

アギオス・ヨアンニス・プロドロモス聖堂、イェラカリ Gerakari⁽⁴⁷⁾、1300年頃⁽⁴⁸⁾

東西方向に2分節されたヴォールト天井を持つ。聖堂装飾の保存状態は良好でないが、幾つかの主題は同定可能である。アプシスには「デイシス」の断片が残る。西壁には出入口があったが、後代ナルテクスを増設した際に拡張され、壁画が損傷している。主題は「磔刑」であったことが分かる。ナオスには「眠り」は現存せず、1300年頃増築されたナルテクスの西壁に一部が残存している。ここでもエルフィのアギオス・ヨアンニス・プロドロモス聖堂のように、十二大祭主題である「変容」もナルテクス内に描かれるため、イェラカリの作例は参考としてここに挙げる。

アギア・マリナ聖堂、カロイェルウ Kalogerou⁽⁴⁹⁾、1300年⁽⁵⁰⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「キリスト・パントクラトル」。西壁には上部に「磔刑」の一部が、下部に「最後の審判」の一部と思われる預言者、聖職者像が見える。「聖母の眠り」は西側ベイの北壁に描かれる。西側ベイのその他の壁画は報告されていない。

アギオス・ゲオルギオス聖堂、クリシディ Klisidi⁽⁵¹⁾、1400年頃⁽⁵²⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「デイシス」が描かれる。扉口は西側に在り、西壁上部に「聖母の眠り」が描かれる。壁面の保存状態は全体に劣悪なため留保付きとなるが、現状では「最後の審判」図は確認できない。

パナギア聖堂、メロナス Meronas⁽⁵³⁾、15世紀初め⁽⁵⁴⁾

三廊式バシリカという比較的珍しいプランであるが、南側廊は16世紀に増設されたものである。

扉口は北壁西側に1カ所、南壁に2カ所の計3カ所に設けられる。「聖母の眠り」は北側廊の西壁に描かれる(図7)。向かい合うアプシスには「プラティテラ型聖母子」を描く。扉口はないが、東の聖母子と西の「聖母の眠り」という組み合わせは、ビザンティン聖堂装飾の定型に従っているとすることが出来る。なお身廊の西壁には「エッサイの木」、向かい合うアプシスには「デイス」が配される。



図7 パナギア聖堂、メロナス

アギア・バラスケヴィ聖堂、メロナス郊外⁽⁵⁵⁾、1300年頃⁽⁵⁶⁾

廃墟となった聖堂だが、一部の壁画が残存している。アプシスは「キリスト・パントクラトール」が、「聖母の眠り」はナオス北壁に描かれている。他の主題としては「受胎告知」、「昇天」の一部が残る程度である。

アルハンゲル・ミハイル聖堂、モナスティラキ Monastiraki⁽⁵⁷⁾、14世紀初め⁽⁵⁸⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「キリスト・パントクラトール」が描かれる。出入口は西側に設けられる。「聖母の眠り」は中央ベイの南側ヴォールト下部に描かれる(図8)。「眠り」の上部には、「洗礼」と判別不能の二図像が並ぶ。その他周辺の説話図

像や向かい側の図像については報告されていない。西壁などの壁画は失われている。



図8 アルハンゲル・ミハイル聖堂、モナスティラキ

アギオス・ゲオルギオス聖堂、モナスティラキ⁽⁵⁹⁾、1350年頃⁽⁶⁰⁾

単廊式バシリカで建立される。アプシスは「聖母子」、扉口は南壁に開く。「聖母の眠り」は西壁に描かれる。ナオス内に残る説話主題の壁画は「眠り」のみで、他は損傷し失われている。

アギイ・アポストリ聖堂、ペトロホリ Petrochori⁽⁶¹⁾、15世紀初め⁽⁶²⁾

単廊式バシリカの構造だが、東側は後代に作り直された部分であり、オリジナルは西側2ベイ区画である。扉口は南壁に設けられている。作り直されたアプシスの主題は報告されていない。西壁には「最後の審判」が描かれる。「聖母の眠り」は最も西側のベイのヴォールト北面に描かれる。「眠り」の下方には地と海から復活する死者が描かれ、これは西壁に描かれた「最後の審判」の一部を成す。このベイの南側には「降誕」が描かれる。前述の通り「降誕」はその形態的類似から「聖母の眠り」との連関性が高いものである。従ってこの2主題の配置は意図的に為されたものと考えられる。

パナギア聖堂、プラタニア Platania⁽⁶³⁾、14世紀初め⁽⁶⁴⁾

東西方向に2分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには聖母子像が描かれる。扉口は西壁にあり、西壁の壁画は「聖母の眠り」である。「最後の審判」は描かれない。

パナギア聖堂、スミレス Smiles⁽⁶⁵⁾、14世紀初め⁽⁶⁶⁾

単廊式バシリカの構造だが、現在見られる聖堂はオリジナルの西壁をアーチ状にくり抜き、西側に拡張した部屋を設けたものである。結果として東西に2分節されたヴォールト天井を持つ状態となった。壁画は拡張工事後に全体に施されたものが現存する。アプシスには「オディギトリア型聖母子」。西壁には下部の聖人像以外は残らない。扉口は南壁に開く。「聖母の眠り」は南壁の最も西側に描かれる。上部のヴォールトには「キリスト嘲弄」が配置される。なお「最後の審判」は描かれない。

パナギア聖堂、トロノス Thronos⁽⁶⁷⁾、1350-75年頃⁽⁶⁸⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「プラティテラ型聖母子」。扉口は西壁にあり、その上部は聖母伝に充てられている。左から「ご訪問」、「聖母誕生」、「金門の出会い」である。「聖母の眠り」は、中央ベイの南壁に配置される。後代に行われた窓の開削工事により、現在は右半分のみが残存する。「眠り」の上方には聖人像を挟んで「降誕」が描かれる。向かい側の北壁面は聖母子のイコン的な立像である。

アギオス・ニコラオス聖堂、ヴィスタギ Vistagi⁽⁶⁹⁾、14世紀中頃⁽⁷⁰⁾

東西方向に2分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「デイシス」が描かれる。扉口は南壁にあり、「聖母の眠り」は西壁に描かれる。

ソティル聖堂、ヴォリオネス Voliones⁽⁷¹⁾、1346/47年⁽⁷²⁾

東西方向に2分節されたヴォールト天井を持つ。アプシスには「デイシス」が描かれる。扉口は西壁にあり、「聖母の眠り」も西壁に描かれる。

アギオス・バシリオス Agios Basileios 市

アギオス・バシリオス聖堂、アギオス・バシリオス Agios Basileios 村⁽⁷³⁾、14世紀初頭⁽⁷⁴⁾

単廊式バシリカ構造に、南北方向への空間を設けたクロス・ヴォールト。アプシス部分など多くが19世紀に改修され、残されたオリジナル壁画の状態も劣悪である。扉口は西側であり、西のヴォールトには「最後の審判」が複数場面にわたり描かれる。その下部には「聖母の眠り」の一部が残存する。

ソティル聖堂、アギオス・ヨアンニス Agios Ioannis 村⁽⁷⁵⁾、1400年頃⁽⁷⁶⁾

東西方向に3分節されたヴォールト天井。アプシスには「デイシス」。扉口は西壁にある。西壁の装飾は「最後の審判」である。「聖母の眠り」は北壁の東側、聖所に近い壁面に描かれる。「眠

り」が西壁に描かれない場合、南北いずれかの壁面の西寄りの区画がその場所に充てられることが多い。聖所に近い本聖堂の配置はその意味で珍しいが、周辺、向かい側の図像は聖人像ばかりであり、積極的なプログラムの意図があるとは判断しづらい。

ソティル聖堂、アクーミア Akoumia⁽⁷⁷⁾、1389年⁽⁷⁸⁾

単廊式バシリカであるが、ナオスには「聖母の眠り」が描かれていない。西側に接続されているナルテクスには北壁に配置されている。上方は「磔刑」と接するが、その他周囲や向かい側の図像はいずれもイコン的な聖人像である。先のアギオス・ヨアンニス村の例と同様、意図あつての配置ではないようである。

パナギア聖堂、ディブロホリ Diblochori⁽⁷⁹⁾、14世紀前半⁽⁸⁰⁾

ヴォールト天井はアーチによって分節されていない。アプシスは「デイス」が描かれている。西壁はナルテクスを増築した際に破壊され図像は残らない。「聖母の眠り」は北壁の聖所近く、東寄りの壁面に描かれる。これはアギオス・ヨアンニス村のソティル聖堂と同様、珍しい位置である。上方にはヴォールトに描かれた「聖母の誕生」が位置する。その他、本聖堂の比較的低い壁面には聖母伝図像が並ぶため、「眠り」もそのサイクル内の図像として並べられた可能性がある。しかし「マリアの誕生」、「マリアの死」の二図像が垂直に配置されている点は、画家がこの二主題を近接して描こうとした意図があつたものと思われる。

パナギア聖堂、ドリミスコス Drymiskos⁽⁸¹⁾、1317/18年⁽⁸²⁾

ヴォールト天井はアーチによって分節されていない。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。扉口は西壁にあり、上部には「磔刑」が描かれる。「聖母の眠り」は北壁の中央ほどに比較的大きな区画をもって配置される（図9）。上方にはヴォールトに「マリアの最初の七歩」と「マリアの誕生」が並んで描かれる。ヴォールトには他にもマリア伝が描かれるが、「誕生」が「眠り」に接して配されるのはディブロホリと同様の工夫である。

パナギア聖堂、キッソス Kissos⁽⁸³⁾、1320-30年頃⁽⁸⁴⁾

ヴォールト天井はアーチによって分節されていない。アプシスは「キリスト・パントクラトル」である。扉口は当初西側にあつたものの、現在は新たに南側に開口している。西壁の主題は「磔刑」である。「聖母の眠り」は北壁の中央ほどに描かれる。上方で接するヴォールトには「ヨアキムの献げ物」「マリアの誕生」が並ぶ。「眠り」の配置および「マリアの誕生」との連関は、先に挙げたディブロホリ、ドリミスコスと同様のものである。スパタラキスは様式判断から三聖堂を同一の画家が手掛けた可能性を指摘するが⁽⁸⁵⁾、「聖母の眠り」に関しての類似はその仮説を



図9 パナギア聖堂、ドリミスコス

支持しているように思われる。

ソティル聖堂、キッソス⁽⁸⁶⁾、1330年頃⁽⁸⁷⁾

現在は二連バシリカ構造だが、北バシリカは後代に増設されたものである。南バシリカはヴォールト天井で、アーチによる分節はない。アプシスの画像は損傷のため主題は不明である。出入口は南側に開く。西壁には中央に「磔刑」、その右側に「聖母の眠り」が描かれる。西壁面に頻出する図像としてこの2主題があるのはこれまで見てきたとおりだが、2主題が西壁に併存するのは珍しい例である。

アギオス・ゲオルギオス聖堂、コハレ Koxare⁽⁸⁸⁾、14世紀半ば⁽⁸⁹⁾

ヴォールト天井はアーチによって3分節されている。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。扉口は西側にあり、上部に「磔刑」が描かれる。「聖母の眠り」は西側ベイの北壁面に配置される。上部のヴォールトには聖ゲオルギオス伝、その他左右や向かい側はイコン的な聖人像である。

ソティル聖堂、ミルティオス Myrthios⁽⁹⁰⁾、1400年頃⁽⁹¹⁾

ヴォールト天井はアーチにより2分節されている。アプシスの図像は「プラティテラ型聖母子」である。扉口は南壁にある。西壁の図像は複数場面の「最後の審判」である。「聖母の眠り」は西側ベイの北壁に、「最後の審判」図像に接して描かれる。また上方のヴォールトも「審判」のモチーフが描かれ、「審判」図に囲まれる形となっている。

アルハンゲル・ミハイル聖堂、オルネ Orne⁽⁹²⁾、1400年頃⁽⁹³⁾

ヴォールト天井はアーチによって2分節されている。アプシスは「プラティテラ型聖母子」。扉口は南壁面に開けられている。西壁は「聖母の眠り」を描く。聖堂内に「最後の審判」は描かれない。

聖堂の情報に対する統計的解釈

スパタラキスによる調査では、119の聖堂中42の聖堂（約35%）に「聖母の眠り」が現存していることが確かめられた。多くの地域では、ほぼ必ずと言ってよいほどに描かれる「聖母の眠り」であるが、クレタにおいては作例がやや少ないように思われる。廃墟に近い聖堂や、壁画の保存状態が劣悪な聖堂も調査対象となっているため、現存していないことをもって描かれていなかったと断ずることは出来ない。一方で調査対象は壁画の残る聖堂に限定されており、かつ断片でも報告されているため、その3割強にしか確認できないのは、クレタの聖堂装飾プログラムでは必ずしも「聖母の眠り」が重要視されていなかったことを示唆するように見える。以下、各聖堂の記述項目について考察する。

a. アプシスの図像について

アプシスの図像は、ビザンティン聖堂の定型が聖母子像を配するのに対し、多岐に亘る。不明・失われたもの7例を除くと、「プラティテラ型聖母子」12例、「オディゴトリア型聖母子」1例、「聖母子像（形態報告なし）」4例と聖母子像が過半を占めるものの、「キリスト・パントクラトール」5例、「デイシス」13例とキリストを中心とした図像の例も多い。「キリスト・パントクラトール」はドームを戴く聖堂であればその天頂に描かれるべきものであり、そのように大規模でないクレタの単廊式バシリカ聖堂では、ドームからアプシスへと場を移したと理解することが出来る。一方で単独の数字では最も多い「デイシス」は、キリストを中心に聖母マリアと洗礼者ヨハネが左右に配され、人類の救済を嘆願するという終末論的図像であり、単独で聖堂中央に描かれる例は本来多くない。しかし本論冒頭で述べたような「周縁」という観点に立てば、同じく周縁部である現トルコ・カッパドキアには、やはりアプシスに「デイシス」を置く例が多く見られ、興味深い点である⁽⁹⁴⁾。また、アプシスのキリストは「パントクラトール」と「デイシス」と必ずしも区別されるものとも言えない。「パントクラトール」単独か、「デイシス」か、という問題は、アプシス・コンクの面積によるところが大きいと思われる。クレタには狭いアプシスが多く、そこに「デイシス」の三者を描くことが困難である場合がしばしばある。いずれにしても、そのキリストは天に在り、やがて来る終末において人類を裁く主なのである。

本論は「聖母の眠り」を考察の中心とするためなぜアプシスに「デイシス」が描かれるかという問題は保留とするが、周縁部に同様の装飾プログラムがあるという事実は、中央で変化して

いったプログラムのより古い形が残されているのではと感じさせる。また聖母子像について、1例のみの「オディゴトリア型」をスパタラキスは「珍しい選択で、通常はプラティテラやその他の型が選ばれる」と述べるが⁽⁹⁵⁾、ビザンティン聖堂全般を見るなら、むしろ他のタイプであるキリストを腕に抱く「オディゴトリア型」などが数的優位を占めるように思われる。「プラティテラ型」が頻繁に選ばれるのは、小型聖堂が多く造られる後期のローカルな現象であると考えられる。

b. 西壁の図像と「聖母の眠り」の配置について

ビザンティン聖堂の定型では「聖母の眠り」は西側に開いた扉口の上部に描かれる。向かい合う形となる東のアプシスの「聖母子」と形態的類似、意味的対照を形作ることは先に述べたとおりである。しかしクレタの聖堂では、必ずしも西壁の主題は「眠り」に限らない。「磔刑」8例、「最後の審判」が7例あり、「眠り」が14例（うち1例は西側ヴォールト天井）となる。不明13点を除けば最も多い主題であるものの、「磔刑」「最後の審判」の数も無視できない比率である。また、扉口は西側がやはり最も多いものの、これも南北壁面に開口するものが少なくない。何より、西側に扉口が開き、かつ西壁に「眠り」が描かれる聖堂は8例のみである。従って、こと「聖母の眠り」を見る限り、クレタの聖堂はビザンティン聖堂装飾プログラムの定型から逸脱するものが多いと指摘できる。

特に「最後の審判」に注目すると、ナオス西壁に「最後の審判」を描く例は、古いものとしてイタリア、カプアのサンタンジェロ・イン・フォルミス（11世紀後半）、トルチェッロのサンタ・マリア・アッスタ（12/13世紀）などが知られる。これらは厳密にはビザンティン聖堂ではないものの、その図像プログラムにビザンティンの影響が強く見られる。そしてこのように西壁を「最後の審判」で飾るのは、中期ビザンティン期の一種の定型であったと考えられることが指摘されている⁽⁹⁶⁾。一方、先述のようにビザンティン聖堂の定型は中期以降、十二大祭サイクルの整備と共に西壁に「眠り」を描くようになり、「審判」はむしろナルテクスをその中心の場とするようになった。従って、「審判」がクレタの聖堂で多く西壁に配置されるのは、やはり古い定型に基づいてプログラムが構築されているように見えるのである。「聖母子」と「聖母の眠り」が聖堂の東西で呼応するように、クレタでアプシスに頻出する「デイシス」はその意味で「最後の審判」と強く連関する図像である。

今一度「眠り」の配置について考えてみると、西壁14例に対し、北壁17例、南壁6例、ナルテクス4例が確認できた。「西壁」の定型が崩れているだけでなく、明らかに北壁への偏りが見られる。さらに北壁の中でもより西側の壁面が選択されることが多い傾向がある。各聖堂の図像配置を確認した限り、一部で「降誕」や聖母伝と隣接させる工夫はなされているものの、北壁に描かれる積極的理由は見出せなかった。現状では、これはクレタの内部で先行作例を模倣し続けた

結果、伝統的な配置となっていたものとする。一方で西寄りの配置を採るのは、消極的ではあるものの西壁に描かれるという伝統もまた引き継いでいるものか。

クレタにおける聖堂装飾プログラムと「聖母の眠り」の位置づけ

本考察の最後に、なぜクレタでは「聖母の眠り」が必ずしも西壁に描かれなかったかを問うてみたい。まず、本来東のアプシスで呼応すべき「聖母子」の問題が挙げられよう。クレタのアプシスで最も多い図像は聖母子像であるが、そのうちでも「プラティテラ型」と呼ばれる図像であり、マリアの胸元や腹部にメダイオンが配され、その内部に幼児キリストの半身像が描かれるという構図を採る。後期ビザンティン期にはアプシス装飾への「プラティテラ型」採用が増すことが指摘されているものの⁽⁹⁷⁾、聖母子像のほぼ全てが「プラティテラ型」で占められることは特殊なように思われる。ビザンティンの多くの聖堂では、同じ聖母子像であってもクレタでは1例のみであった「オディゴトリア型」を初めとしたマリアがキリストを腕に抱える構図が採用される。聖母子像と「眠り」との対応関係において、両者は「大人と子供」の図像であるだけでなく、「大人が子供を抱く」という形態的な対応が重要であり、これこそが聖堂装飾プログラムにおいて両者を東西に配する大きな契機となった⁽⁹⁸⁾。しかしプラティテラ型は、胸元のメダイオンという神秘的なキリストの表現により、「眠り」のマリアの魂を抱くキリストとは、対応関係を築くことが困難になる。「キリスト・パントクラトル」や「デイシス」も同様に西壁の「眠り」と呼応するものとは言い難い。

次に「最後の審判」が西壁に頻出する点も重要であろう。西に「審判」を置くというより古い定型が、恐らくはクレタという土地の周縁性により、長く保存されることとなった。同時に「眠り」を西壁に描くという新しい定型も中央ほど広く普及しなかったと考えられる。また一歩踏み込んだ捉え方をすれば、「最後の審判」と「聖母の眠り」はある意味で等価な存在ではなかったか。筆者は別稿においてギリシアのある聖堂において西壁の「眠り」とナルテクスの「審判」が呼応することを指摘した。すなわち両画像はいずれも終末論的図像であり、聖堂を訪れた信徒にキリストの再臨と善きキリスト者の救済がヴィジュアルに示されることを明らかにした⁽⁹⁹⁾。このように「眠り」と「審判」が近い性質を持つ図像と考えれば、西壁図像のヴァリエーションとして「眠り」と「審判」が選択可能なものであったのがクレタでの聖堂装飾プログラムと言えるのではないかと⁽¹⁰⁰⁾。西壁に「眠り」を描く聖堂のいずれもが、ナオス内に「審判」を描かないことが傍証とも言える。ただし「眠り」図は十二大祭の一つを主題とし、「審判」より重要度が高い図像であるため、「審判」が描かれることは「眠り」を不要とする理由にはならない。またアプシスの図像が「デイシス」や「プラティテラ型聖母子」である点が、必ずしも「眠り」を西壁に描かない選択を容易にしたことだろう。

結

本論ではクレタ島のビザンティン聖堂に描かれた「聖母の眠り」について、主に配置と関連する図像の選択について数量的な観点から解釈を試みた。クレタの「眠り」は、通常の聖堂装飾プログラムと異なる配置を多く採る。それは「眠り」の配置が定型化する以前の様相を残すものであり、また本来のプログラムで呼応すべき図像を欠いたため、定型の束縛が弱かったものと考えられる。先行研究ではクレタ内で解釈が完結しており、他地域との比較が積極的になされなかったため、その特殊性が十分には明らかにされてこなかった。ビザンティン帝国の中でも周縁部には、より古い図像、より古いプログラムが保存され、また地理的に孤立した環境により、手近な作例を参考にしながら作品を描き続けることになったのだろう。そのような可能性を具体的な数値により示すことができたものとする。

本論では図像の配置についての解釈に限り、個別の作例に対する図像学的解釈は目的としなかったが、結論に関連する点の一つ述べておきたい。図3、4、6の例に見るように、クレタの「聖母の眠り」には上空にキリストを左右から挟むように飛来する2天使が描かれる作例がある。これは他地域の作例では首都由来の10世紀の象牙浮彫など、中期に限って登場するモチーフであり、後期には見られなくなる。しかし、「周縁部」のカップドキアには、クレタと同様後期の作例に2天使のモチーフが現れる。筆者はこのカップドキアの例について「周縁部における古い定型の保存の例」と解釈した⁽¹⁰¹⁾。クレタにおいても同様の判断ができるであろうか。残念ながらクレタの作例については未だ作例の画像収集が進んでいないため、今後のフィールドワークを踏まえてより詳細な議論を行いたい。

注

- (1) 口頭発表「カップドキアにおける「聖母の眠り」図像の構図について——辺境における定型保存の一例として」、於シンポジウム「ビザンティンのカップドキア」、2016年3月27日、早稲田大学。なお同発表を基にした論文を出版予定である。
- (2) I. Spatharakis, *Byzantine Wall Paintings of Crete*, 4 vols., 1999-2015, London (vol.1) and Leiden (vols.2-4).
- (3) その他、クレタのビザンティン聖堂に関する主な研究は以下。K. Kalokyris, *The Byzantine Wall Paintings of Crete*, New York, 1973; K. Gallas, K. Wessel, M. Borboudakis, *Byzantinisches Kreta*, München, 1983; M. Bissinger, *Kreta: Byzantinische Wandmalerei*, München, 1995; I. Spatharakis, *Dated Byzantine Wall Paintings of Crete*, Leiden, 2001.
- (4) H. Maguire, *Art and Eloquence in Byzantium*, Princeton, 1981, pp.59-61. 聖堂内の配置についての重要性は以下の拙稿も参照。「パナギア・マヴリオティッサ修道院の聖堂装飾プログラム—「キミス」と「最後の審判」を中心として—」『美術史研究』48冊、2010年、pp.23-44.
- (5) Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol. 1, pp.47-71. なお地名は基本的に聖堂が建つ村名であるが、一般的なビザンティン聖堂の記述に従い「村」の標記は省略することとする。ただし村名が聖人名を使い、聖堂名との区別が付きづらい場合は特に記す。

ギリシア、クレタ島のビザンティン聖堂における装飾プログラムの特質について

- (6) *Ibid.*, p.71. 聖堂の成立年代は銘文が残らない場合様式判断に基づくものが多い。本論は聖堂内の図像配置に主眼を置くため、煩雑を避ける目的で成立年代はスパタラキスの説を引くのみとする。また現存する壁画の成立年代が複数の時期にわたる場合、「眠り」の成立年代を記す。当然聖堂によっては異論があるものもあるが、それについてはスパタラキスの各聖堂の記述に詳細が論じられるため参照されたい。
- (7) プラティテラとは「天よりも広き」との意で、特定の聖母子像のイコノグラフィーを指す言葉として用いられる。すなわち両腕を挙げた「オランス」の姿勢をとるマリアと、その胸元にメダイヨンの幼児キリスト半身像がその特徴である。聖母子像の分類は菅原氏の論を参照。菅原裕文『ビザンティン世界におけるエレウサ型聖母子像の受容』博士論文、早稲田大学、2012年、pp.12-36.
- (8) E. Kitzinger, *The Mosaics of St. Mary's of the Admiral in Palermo*, Washington, D.C., 1990, pp.184-189; 武田一文「ビザンティン聖堂の「聖母の眠り」図における十二使徒の表現について」『Waseda Rilas Journal』Vol.2, pp.73-84.
- (9) Spatharakis, *op.cit.*, p.69.
- (10) *Ibid.*, pp.85-97.
- (11) *Ibid.*, p.90.
- (12) *Ibid.*, pp.112-120.
- (13) *Ibid.*, p.120.
- (14) *Ibid.*, pp.141-152.
- (15) *Ibid.*, p.145.
- (16) *Ibid.*, pp.171-178.
- (17) *Ibid.*, p.178.
- (18) *Ibid.*, pp.225-234.
- (19) *Ibid.*, p.234.
- (20) *Ibid.*, pp.235-262.
- (21) *Ibid.*, p.235.
- (22) *Ibid.*, pp.263-268.
- (23) *Ibid.*, p.268.
- (24) Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol. 2, pp.20-45.
- (25) *Ibid.*, p.20.
- (26) *Ibid.*, pp.46-56.
- (27) *Ibid.*, p.55.
- (28) *Ibid.*, p.56.
- (29) *Ibid.*, pp.57-63.
- (30) *Ibid.*, p.57.
- (31) *Ibid.*, pp.64-77.
- (32) *Ibid.*, p.76.
- (33) *Ibid.*, pp.124-134.
- (34) *Ibid.*, p.134.
- (35) *Ibid.*, pp.150-165.
- (36) *Ibid.*, p.165.
- (37) *Ibid.*, pp.169-175.
- (38) *Ibid.*, p.175.
- (39) Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol. 3, pp.7-13.
- (40) *Ibid.*, p.7.

- (41) *Ibid.*, pp.27-33.
- (42) *Ibid.*, p.33.
- (43) *Ibid.*, pp.34-39.
- (44) *Ibid.*, p.39.
- (45) *Ibid.*, p.67-73.
- (46) *Ibid.*, p.67.
- (47) *Ibid.*, pp.74-80.
- (48) *Ibid.*, p.80.
- (49) *Ibid.*, pp.99-101.
- (50) *Ibid.*, p.99.
- (51) *Ibid.*, pp.108-109.
- (52) *Ibid.*, p.109.
- (53) *Ibid.*, pp.119-174.
- (54) *Ibid.*, p.174.
- (55) *Ibid.*, pp.180-181.
- (56) *Ibid.*, p.181.
- (57) *Ibid.*, pp.182-185.
- (58) *Ibid.*, p.185.
- (59) *Ibid.*, pp.186-187.
- (60) *Ibid.*, p.187.
- (61) *Ibid.*, pp.190-192.
- (62) *Ibid.*, p.192.
- (63) *Ibid.*, pp.193-202.
- (64) *Ibid.*, p.202.
- (65) *Ibid.*, pp.203-208.
- (66) *Ibid.*, p.208.
- (67) *Ibid.*, pp.209-220.
- (68) *Ibid.*, p.220.
- (69) *Ibid.*, pp.231-232.
- (70) *Ibid.*, p.232.
- (71) *Ibid.*, pp.233-234.
- (72) *Ibid.*, p.233.
- (73) Spatharakis, *Wall Paintings.*, Vol. 4, pp.9-11.
- (74) *Ibid.*, p.11.
- (75) *Ibid.*, pp.12-15.
- (76) *Ibid.*, p.13.
- (77) *Ibid.*, pp.16-36.
- (78) *Ibid.*, p.16.
- (79) *Ibid.*, pp.42-53.
- (80) *Ibid.*, p.51.
- (81) *Ibid.*, pp.54-69.
- (82) *Ibid.*, p.55.
- (83) *Ibid.*, pp.74-85.

ギリシア、クレタ島のビザンティン聖堂における装飾プログラムの特徴について

- (84) *Ibid.*, p.85.
- (85) *Ibid.*, pp.84-85.
- (86) *Ibid.*, pp.86-91.
- (87) *Ibid.*, p.91.
- (88) *Ibid.*, pp.106-110.
- (89) *Ibid.*, p.110.
- (90) *Ibid.*, pp.165-171.
- (91) *Ibid.*, p.171.
- (92) *Ibid.*, p.172-176.
- (93) *Ibid.*, p.176.
- (94) C. Jolivet-Lévy, *Les églises byzantines en Cappadoce: le programme iconographique de l'abside et de ses abords*, Paris, 1991.
- (95) Maguire, *op.cit.*.
- (96) 辻佐保子「中期ビザンティン世界における「最後の審判」図像の定型化と多様化」『ビザンティン美術の表象世界』、岩波書店1993、pp.289-327.
- (97) 菅原裕文「後期ビザンティン聖堂におけるプラティテラ型聖母子像——後期ビザンティン聖堂（13～15世紀）における儀礼化の進展」『エクフラシス』4号、2014年、pp.78-88.
- (98) Maguire, *op.cit.*.
- (99) 武田、前掲論文。
- (100) なお本論では同じく西壁に描かれた「磔刑」の解釈については今後の課題としたい。ただしその方向性を考える上で、同じく島嶼部であるキプロス島に残るビザンティン聖堂にも、少なくない数の聖堂で「磔刑」が西壁に描かれているという事実をひとまず挙げておく。
- (101) 武田、前掲口頭発表。

【図版出典】

- 図1 Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol.1, plate. 9a.
- 図2 *Ibid.*, plate. 309.
- 図3 Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol.2, plate. 41.
- 図4 *Ibid.*, plate. 53.
- 図5 *Ibid.*, plate. 252.
- 図6 Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol.3, plate. 21.
- 図7 *Ibid.*, plate. 397.
- 図8 *Ibid.*, plate. 361.
- 図9 Spatharakis, *Wall Paintings*, Vol.4, plate. 123.

【後記】本研究は JSPS 科研費26284025の助成を受けたものである。